「アメリカの幼稚園に通って」

平田純子

長男圭佑は父親の留学に伴い、四歳二ヶ月の時から一年四ヶ月程、アメリカで生活する機会を得ました。滞在先は、イリノイ州のノースブルックというシカゴの北にある郊外の緑の美しい町でした。

日本を発つ時、お茶の水女子大学附属幼稚園の三年保育の年少組に在園しており、幼稚園の生活にも慣れ、お友だちと楽しく遊べるようになったところでした。せっかく慣れた幼稚園を離れて、ことばのわからない国へ行き、新しい環境にうまく適応できるかしら、病気は大丈夫かしら、と親としてはいろいろ不安がありましたが、半年前にアメリカに渡っている父

親が現地で準備をすすめてくれていましたので、私と子ども二人（四歳の長男と一歳の長女）は期待と不安を胸に日本を発ちました。

着いた早々、記録的な寒波の襲来に遭い、日本では想像できない厳しい寒さにびっくりし、心細い思いをしました。少しの間も外に立っていることはできず、雪は降りつもっていますが、子どもたちにとっては雪遊びどころではありません。家の中にじっとしている以外できませんので、早速幼稚園を探すことにしました。前もって父親が近くの日本人の方に聞いて調べてありましたので、その中からいくつか問い合わせてみることにしました。まず、地域の公立の幼稚園はすでに定員いっぱいで、順番待ちということでだめでした。次にその地域で知名度の高いモンテッソーリ・メソッドを取り入れている幼稚園に聞いたところ「うちではある期間にわたって在園して効果の出る教育を行なっているので、二年以上通園できないならば受け入れることはできない」と断わられました。そこで同じモンテッソーリ系で少し離れたところにある幼稚園と、近くの日本の男の子の通っている小さな幼稚園を訪ねてみることにしました。二つとも園長先生と直接お会いしていろいろとお話を聞き、園内を見学させていただいた結果、家庭的で親しみやすい雰囲気と、無理のないスケジュールになっているという点で、ラ・プラィ・エコールという家から車で五分程のところにある小さな幼稚園に入れていただくことにしました。

アメリカでは、親の事情によって選択ができるよう、いろいろなタイプの幼稚園があります。通園日数も母親の都合で週三日、又は四日だけ通うケースも多く、日本のようにある年齢になったら毎日通わせるとは限らず、義務教育までの保育の形はさまざまです。入園に際しても、試験はなく、園の責任者と直接面談して決めるケースがほとんどで、外国人の子どもに対する受け入れも全く区別がないようでした。

アメリカでは地域により教育のレベルにかなりの差があるようで、父親が大学のあるエバンストンという町の

中ではなく、少し離れた郊外に住居を決めたのは、子どもの教育に良い環境を選んだためでした。ノースブルックという町は、人種的に黒人が少なく、治安もかなり良く、町の財政も豊かで教育に力を注いでいるので教育レベルが高い地域とされており、日本の駐在員の家族も多く住んでいました。アメリカでの子どもの教育を考える場合こうした配慮も大切なことと感じました。

圭佑は新しい幼稚園の生活を始めましたが、途中から入園する子も多く、他に東洋人もいるので、特別な目で見られることはなく、スムーズに仲間に入れてもらったようです。日本で幼稚園の生活を経験しているので、ことばがわからなくても皆と一緒に行動することができ、最初から特に困ることはなかったようでホッとしました。またはじめに入ったクラスには、既に六ヶ月通園している日本人の男の子がいて、一緒に遊べたことも心強かったことと思います。

外国で暮すには、その国で使われていることばを理解できることが大切ですから、なるべくはやくことばに慣れる環境づくりを考えました。まず、幼稚園で困らないように挨拶と「お手洗に行っていいですか」という英語を教えました。圭佑は恥ずかしがり屋で、思っていることをすぐに言えないところがあり、朝の挨拶も親の方から促して、やっと言うという感じでした。しかし先生方も決して無理強いはなさらず、「朝なのでウォーミングアップに時間がかかるのでしょう」と助け舟を出して下さいました。また朝お会いすると「ステキな色のシャツね」とか「週末は楽しかったの？」など必ず声をかけて下さいます。圭佑も最初はかなり緊張していましたが、次第に慣れて笑顔が出るようになりました。

家庭でもなるべく英語を使うように、とのことでしたが、親子だと照れてしまうのか積極的には話したがりません。でも毎日の幼稚園での生活やテレビなど、次々に耳から入ってくることばを覚えて自分なりに理解していったようです。四歳を過ぎていると、日本語もしっかり話せるようになっていますので、「この英語は日本語でこういう意味のことだ。」と自分で判断しながら覚えて

いったと思います。はじめは単語だけでしたが、少しずつ文章も覚えて、入って半年程たった頃、「今日、圭佑はセンテンスをしゃべりましたよ」と先生がうれしそうに報告して下さいました。ことばに慣れるにしたがって、お友だちとも積極的に遊べるようになり、仲の良いお友だちもできてきました。

また、読み書きも日本にいる間にアルファベットを覚えていましたので、抵抗なく自分の名前を書いたり、単語を見て発音できるようになりました。

しかし、本来、こどもの世界は人種やことばが違っていても、遊びという共通の世界をもっていて、一緒になることができます。特に男の子にとってテレビ漫画のヒーローやロボットのおもちゃなど関心をもつところは同じで、圭佑もアメリカのテレビ漫画にすっかり夢中になり、毎日のように見ていました。おもちゃのコマーシャルもすっかり記憶して、おもちゃ屋さんに行きますと「ボク、これ知ってるよ、テレビで見たから」と、その動かし方までいろいろ知っているのでびっくりさせられました。テレビの子どもに与える影響力は日本もアメリカも同じように大きく、親の毅然とした態度が必要なのは共通です。

幼稚園での毎日の教育は、あらかじめスケジュールがたてられているようで、お部屋の中での活動が主でした。皆で工作をしたり、先生に本を読んでいただいたり、ゲームをしたり、又各自が自由に遊ぶ時間もありました。お天気の良い日は皆で外に出て遊びますが、寒さや強風のため、日本のようにいつでも外遊びができるわけではないので、思いきり駆けまわる時間が少なくかわいそうでした。

この幼稚園には、同じ建物内にプレーセンターといって保育時間以外に子どもたちを預かる施設がありました。ここでは幼稚園の後、お弁当を食べて遊ぶことができます。圭佑も半日の保育時間ではもの足りず、また日本の幼稚園の保育時間に合わせるつもりで、週三回お弁当持参でここへ通っておりました。特に決ったスケジュールはたてられていないので、子どもたちは各自好きに

ゲームやぬり絵、ブロック遊びなどをしていました。このセンターの先生が圭佑をとても可愛がって下さり、圭佑も先生になついてここへ行く日を楽しみにしていました。幼稚園の時間とは違って、小人数の中でリラックスした気分で遊べ、自然に英語と接するのでその意味でも効果的だったと思います。最後の頃には、「圭佑は最初はとても緊張しておとなしかったけれども、この頃は私をからかったり、ふざけたりして、すっかり活発に変わってびっくりしているんですよ。」と言われ、一年近くの間にすっかりアメリカの生活に溶け込んでいるのがわかりました。

アメリカで生活し、アメリカの幼稚園に通わせて、日本との違いをいくつか感じましたが、まず、アメリカでは「こうしなければいけない」という規則は最低限にして、あとは個人の自由に任せていることが多い、ということです。別の観点から言うと、日本では、社会性は厳格なルールに従い、協調性を養うことに重点が置かれているように思えますが、アメリカでは人に迷惑をかけない最低限のルールを身につけていれば、あとは他人とのコミュニケーションの能力を身につけることに重点が置かれているように思います。

アメリカの子どもたちはどこでも座り込み、好きな格好で遊んでおり、日本人から見て決してお行儀がよいとは言えません。またおもちゃや本を家から幼稚園に持っていくことも自由ですし、着るものも季節にこだわりません。母親も、朝子どもを送る際、教室まで入る人もいますし、車寄せで子どもを降ろして一人で行かせる人もいます。

おやつや食事の前に手を洗う習慣はありません。日本では必ず手を洗うよう小さい時からしつけますが、アメリカではあまり気にしない親が多いようです。このように、日本の方が決められた規則を守ったり、グループ活動を通して人との協調性の大切さを小さいうちから学んでいっているように思います。

一方、アメリカでは自分の意思をはっきりことばで相手に伝えることが何より必要ですから、小さい時からも

のおじせずに人に接して、意思表示できる訓練が家庭内でも、幼稚園でもなされているのを感じました。日本のようにことばに出さなくても何となくわかってもらえるとか、以心伝心ということは通用しません。

またアメリカは画一性よりも個性を重んじる国ですから、子どもに教える際も、皆で一緒にというより、各子どものレベルや個性に合わせて個々にその子の興味をひき出すように行なっています。また良い面を大いにほめて、子どもにやる気を起こさせ得意な面をどんどん伸ばすというやり方に徹しているように思われました。

圭佑のアメリカでの生活は一年余で長い期間ではありませんでしたが、その間に幼稚園を嫌がったり、日本に帰りたいと言い出したりすることは一度もなく、家中で一番アメリカ生活を楽しんでいたように思います。日本とアメリカの様々な習慣やことばの違いも自然に受け止めて、親が困ったり、悩んだりすることは何もありませんでした。もう少し年齢が大きければ、学校生活でことばのハンディを感じたり、生活面の違いも拒否反応をも

ったり、ストレスを起こしたりするかもしれませんが、年齢的にまだ小さく、親や先生の言うことを素直に受け入れてくれたので、そういった問題は生ぜずに済みました。

帰国してすぐ、日本の幼稚園に戻り、皆と仲よく遊べるかしら、お行儀は大丈夫かしらと心配しましたが、思ったよりスムーズに入っていけてホッとしました。日本に帰れば、また日本の生活になじんで、覚えた英語もどんどん忘れていくようです。親が心配するより、子どもは自分の置かれた環境に、それなりに適応していくものだと改めて感じました。

このアメリカでの体験が、これからどのような影響を与えるのかまだわかりませんが、圭佑の中にはいろいろなものが思い出と共に残っていることと思います。

アメリカの幼稚園最後の日、サヨナラ・パーティーを開いて下さり、別れを惜しみました。圭佑は先生からお別れのキスを受けて、照れながらも満足気でした。私も親として、限られた期間の中でも、できるだけ楽しい幼稚園生活を送ることができるよう、またいろいろなことを教えようと常に手を貸して下さった先生方に感謝の気持ちでいっぱいでした。

過ぎてしまうと短い期間でしたが、親子共、様々な経験をしました。厳しい自然環境と、その中でたくましく生きる人々に会い、旅行先では、スケールの大きい、豊かな自然を満喫することができました。おかげで圭佑は、動物や自然に対する興味を大いに深めたようです。また、生活習慣や考え方、人間関係など、さまざまな違いを肌で感じることができました。

これからの国際社会に生きる人間として、大きく、豊かに成長していく上でこの体験を通して得たものが、良い糧となれば、と願っております。